

Euro Dance Impression

ユーロ・ダンス・インプレッション

written by MASUMI

空間演出のうまさ

鈴木香里とセバスチャン・ヴエイヨ
[Ningyo Lab]

コンテンポラリーの鈴木香里とマリオネットのセバスチャン・ヴエイヨによる新作「Ningyo Lab」。まだ若いカンパニーだが、ヴエイヨは天理文化センター主催のバージョンクリップで人気投票1位となった経歴を持つ。これまでに数作見たが、スペースの使い方がうまく、いつも感心する。今回の新作は主導権を持った鈴木が前面に出る。人形か人間か、栗色の長い髪の無表情な女、カメラを前にセクシーさをアピールする女、木の手足に楕円形の箱の胴体を持つ女、部屋でひとりパソコン相手に思いにふける女。女の側を鈴木が踊り、男から見た女をヴエイヨが演じる。たったふたりなのに、様々な思いが交差し、次元がガラリと変わる構成は見事だ。見事といえばスペースの使い方もうまく、ベルタン・ポワレの小さな舞台がまた新しい空間に変わった。例えば、水平線に映し出された映像を見るシーン。すでに録画されたものかと思っていたら、実はこれが下手中央の袖の中で起こっていることの実況中継。光が漏れる袖から徐々に動きの一部が見え始め、そこでようやくからくりがわかる仕掛けだ。また、楽屋に通じる後ろのドアが開けば、そこはもうひとつの別の世界。奥行きが広がる。なお、今回は映像も凝っていて、特にアコーディオンを引く男の映像が印象的だった。音楽も素晴らしかったが、いつの間にかアコーディオンが鈴木になり、音楽に込められた気持ちが女に重なる。ラストの乳幼児をまるでアクロバットサーカスのように振り回して遊ぶ映像は非常に面白かったが、作品の意図とは異なるように感じた。なお、この中でヴエイヨが数年前に観客賞を取った作品が組み込まれているが、これが出色。片手に人形を持ち、黒子の衣装で人形と戯れる人体マリオネット。シャープな動きと、まさに命を吹き込まれたかのような人形の動きは、何度見ても面白い。(4月10日天理日仏文化協会 Espace Culturel Bertin Poirée)

